

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：31501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370073

研究課題名(和文) 芸術的感性におけるスピリチュアリティの占める位置に関する量的及び質的研究

研究課題名(英文) A Sense of Spirituality in Art, from Quantative to Qualitative approach

研究代表者

久保田 力 (KUBOTA, Chikara)

東北芸術工科大学・教養部・教授

研究者番号：80192566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：スピリチュアリティと芸術やデザインの創作活動との関係を探求するために、美大学生を対象に大規模調査を実施した。スピリチュアリティ及び家族イメージに関する質問項目を設定した上で、本調査研究の特色として色彩を用いた回答を採用したことが挙げられる。調査の結果、母のイメージスペクトルは父のイメージスペクトルとほぼ補色残像関係にあること、及びスペクトル全体を眺めると、色選択比率の割合が母と父でほぼ逆転の関係になっていることの2点が明らかにされた。(219字)

研究成果の概要(英文)： We carried out a survey of 1,272 art university students to explore the relationship between spirituality that they experience as artists, and their artistic creations. We designed a survey format about spirituality that included images of their parents and siblings. We asked the students to answer the survey questions using colors that we provided which they thought corresponded to the image of any given family member. This way of answering according to color names is a unique method that we decided to try. For both male and female students the survey showed that the array of colors relating to the image of both father and mother are complementary color relationships. The survey also showed that the selection ratio of image colors of the father is inversely related to that of the mother.

研究分野：インド思想、宗教学

キーワード：スピリチュアリティ 芸術 質問紙調査 色イメージ 色彩感性 家族関係 父母

1. 研究開始当初の背景

スピリチュアリティあるいは「精神世界」と呼ばれる心理的傾向は、現代の芸術やデザインの創作活動に、一体どこまで、どのように関係しているものなのか、あるいは関係していないのか？われわれの疑問の起点はここにある。スピリチュアリティあるいはスピリチュアルという語は近年市民権を得ているにせよ、その意味するところは真摯に宗教的なものから占いや相性判断からオカルト的なものまでかなり広範囲な射程距離を放っている。しかし、本研究においては、とりあえず芸術的な創作活動の源泉となりうるような「自己の心の内面への深い問いかけや向き合い方」を指すものとして、すなわち、自己と他者、生や死、喜びや悲しみ、戦争と平和などというような、「自分が表現者として何かを造形化させるための生き方の感性」であり、「心の態度」のことを指すと考える。したがって、それは人によってはオカルト的側面をも含むこともありうるし、あるいは反対に、まったく科学的で合理的な世界しか認めない理性的な心の態度もあるだろうと思われる。そして、このようなスピリチュアリティは当然のことながら現代における若者たちの宗教性もしくは宗教に対するスタンスの問題と密接に関係してくるはずである。

芸術的な感性はどこまでスピリチュアルなものなのか。またそれはどこまで知性的なものであるのか。芸術的感性と知的感性とスピリチュアルな感性。これらの3者は実際にはどのように関係し合うのであろうか。このような問題意識を抱きつつ、現在の大学生たちの芸術的創造力の基盤となっているであろう心理的特徴の一端を実証的に調査・分析したいと思う。それによって、今後の芸術・デザインが向かう方向性や問題点、さらにはアートそのものに潜む可能性までもが浮かび上がってくる可能性にも期待するものである。

2. 研究の目的

「芸術とスピリチュアリティ」に関しての具体的且つ全体的な実証的研究に関しては、意外にも未だまとまった研究成果が問われていない。われわれは2度の大規模な質問紙調査を実施したが、今回さらに全学的な調査を展開し過去2度の調査結果を補強する結果

を得るべく精密な調査設計を行った。その上で、芸術的感性と色彩感性や死生観、生命観、人間関係、感情、五感などの関係性についての諸特徴を細部にわたり究明していく。芸術的感性とは如何なるものかということが本研究の主眼であるが、それを具体的に浮き彫りにして輪郭づけるために、それが色彩感性やスピリチュアリティ、人間関係などどのように関わるのか、あるいは関わらないのかということを経験的手法や思想史的手法によって明確にしていくことを主たる研究目的とする。質問紙調査結果の全貌公開を踏まえての研究は、本当はこれからが本番の時期だと認識している。このような研究は、上記の如くアカデミックな成果として意外にも先行研究が少ないので、研究者のみならず芸術に関心のある人たちにとっても興味深いと思われる。

3. 研究の方法

2013年12月から2014年1月にかけて、東北芸術工科大学全学部生(2学部9学科)を対象とした「色・五感・心理等に関するイメージ調査」という質問紙調査を実施した。東北芸術工科大学全学部生2195名(2013年12月時点)のうち、その57.95%に相当する1272名の回答を得ることができた。

我々は試行錯誤して「色・五感・心理等に関するイメージ調査」を開発した。この質問紙は、以下の6種のカテゴリーから抽出した全88個の質問項目で構成されている。

- 1 問1~5 = 趣味・嗜好
 - 2 問6~15 = 感情と色
 - 3 問16~27 = 五感と色
 - 4 問28~36 = 人間関係と色
 - 5 問37~44 = 生育環境・個人史的背景と色
 - 6 問45~88 = スピリチュアリティ
- a. 問45~50 = 死生観と色
 - b. 問51~71 = 2011年1月実施の第2回の調査票から、因子負荷量の多かった質問項目
 - c. 問72~86 = 比嘉論文より借用(比嘉勇人「Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討」、『日本看護科学学会誌』22(3), pp.29 - 38, 2002.)
 - d. 問87・88 = われわれが新たに追加した項目

4. 研究成果

本調査に特有な方法である色彩による回答の分析によって明らかにされた父と母に関するイメージの特徴について述べる。問28は「あなたにとってお母さんとは色に例えるとどの色に近いですか。」であり、問29は「あなたにとってお父さんとは色に例えるとどの色に近いですか。」である。最初に学生の性別による回答の特徴に見られる相違について、続いて父及び母に関する色彩回答の特徴について述べる。

(1) 学生の性別による回答の特徴

男子学生が抱く父母の色イメージ

まず、男子学生は母に対しては、図1のように、多い順に、1位「ピンク」(19.3%)、2位「クリーム」(14.9%)、3位「赤」(12.2%)、4位「オレンジ」(11.5%)、以上の4色が10%を超えた選択比率であり、以下は5位「ラベンダー」(5.7%)、6位「黄色」(5.4%)、7位「えんじ」(3.7%)と選択率は約半分以下になっていく。

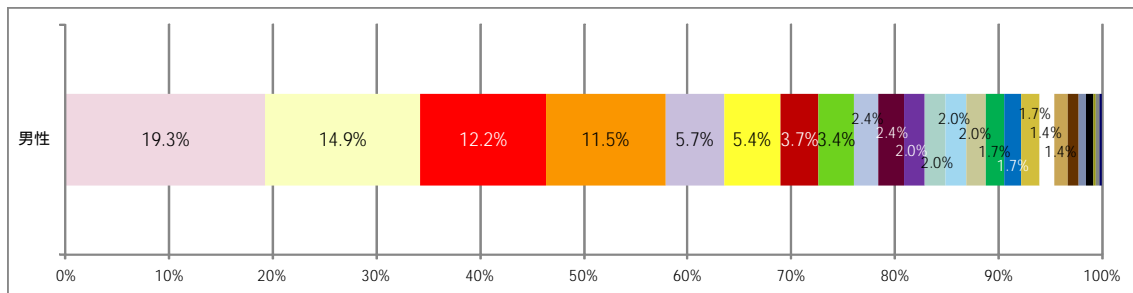


図1 男子学生における母のイメージ色

一方、父親に対しては、図2のように、1位「ダルブルー（縹（はなだ）色（いろ）」(10.5%)、2位「青」(8.5%)、3位「空色」(6.1%)、4位「こげ茶」(6.1%)、5位「紺」(6.1%)、6

位「深緑」(5.4%)、7位「黒」(5.4%)等々と青色系統中心の寒色系の色が選択されているのが特徴である。

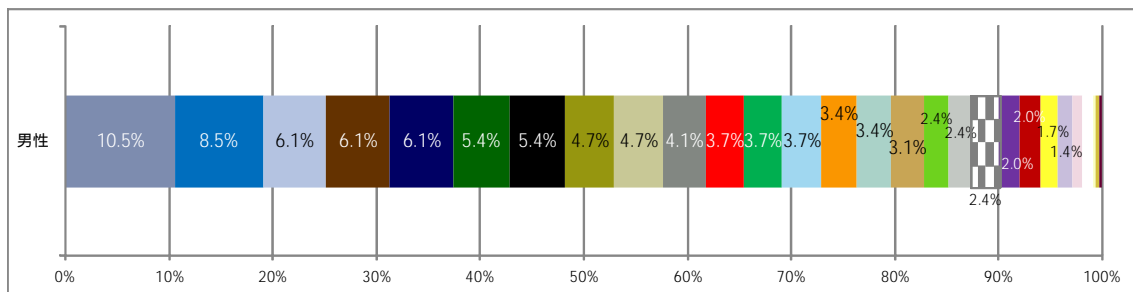


図2 男子学生における父のイメージ色

女子学生が抱く父母の色イメージ

女子学生は、母親の色を、やはり多い順に挙げると、図3のように、1位「クリーム」(14.8%)、2位「ピンク」(14.0%)、3位「オ

レンジ」(11.1%)、4位「ラベンダー」(8.1%)、5位「赤」(6.8%)、6位「えんじ」(5.0%)等々とつづく。

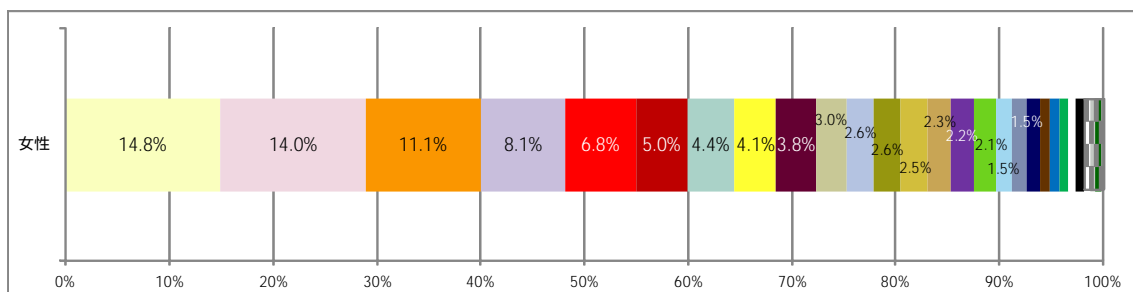


図3 女子学生における母のイメージ色

また、女子学生の父親へのイメージ色は、図4のように、多い順に、1位「青」(11.4%)、2位「ダブルブルー」(11.4%)、3位「紺」(9.3%)、4位「深緑」(7.2%)、5位「空色」(6.3%)、6位「黒」(5.6%)、7位「こげ茶」(4.1%)等々とつづく。ここで、興味深いのは、第8位に「透明」が3.8%(37名)いることである。この数値は比較的多いと思われる。男子学生にとっても、父のイメージ色の28色中第19位ながらも、「透明」との回答が2.4%見られることである。男女ともに、母親のイメージにほとんど「透明」は回答されていない。特に、男子学生は母のイメージとして「透明」を選択した者は298人の全男子回答者中に1人も存在しなかった。女子学生は母を「透明」と回答したのは6名=0.6%存在するにとどま

る。全体としても、第25位の0.5%になる。一方、父に対しては「透明」という選択者が3.4%=43名も存在することは、決して無視することのできない数値である。「透明」を空気のように見えないけれども大事な存在と捉えることも不可能ではなからうが、通常そのようには考えにくいものだろう。この点は他の質問項目との関連性における分析や、今後質的調査を進める中で考究していきたい。ここでは、現代日本における父親の存在感の薄さ、影の薄さが一部の若者たちにおいてははっきりと認められるという解釈的特徴のみ指摘しておく。この場合、男子学生よりも女子学生のほうが、父親の存在感の薄さを強く感じているということが出来る。

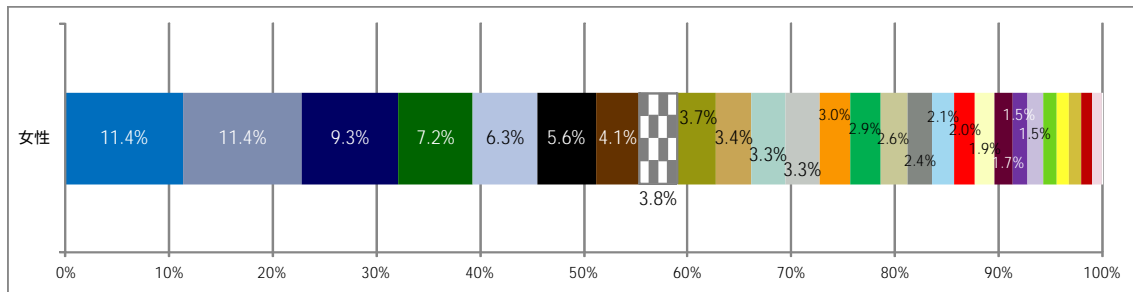


図4 女子学生における父のイメージ色

(2) 父及び母に関する色彩回答の特徴

母のイメージに「クリーム」が最上位層に登場するのは今回の調査結果に特有な傾向である。また、いずれの場合も母よりも父の色イメージのほうがより細かく多彩に選択分離されている。その理由に関しては詳らかにできないが、現代における父親像の社会的多様性ととも、その不安定さの一端をも象徴していると解釈しうるのではなからうか。あるいは逆に、母親像のほうが社会的にはよりステレオタイプ化されているからなのかもしれない。母のイメージスペクトルは、父のイメージスペクトルとほぼ補色残像関係、広義の反対色対応関係にあるといえる。「黄色 青紫」「黄緑 紫」「赤 青緑」などといった補色または反対色の対応性が少なくとも上位4位までの色に見出すことができる。大学全体の帯グラフ(図5、図6)で言えば、母の1位「ピンク」の補色・反対色は、父のイメージの第4位「深緑」と補色関係を成す。母の第2位「クリーム」の反対色は父の第1

位~3位までのブルー系全てに対応する。母の第3位「オレンジ」と第4位「赤」の補色は父の第4位の「深緑」であるが、広義の反対色と解すると第1位から3位までのブルー系の色も含めて見てよい。

上位4色に限らず、父と母のイメージは大体において相補的な反対色対応関係を成しているといっても過言ではないだろう。そのように見るなら、父の残像が母(の色)であり、母の残像が父(の色)なのだということができる。

このことから、両親を捉える息子や娘たちの目には、父と母を相互補完的な関係として映っていると推察することができる。父と母が、色という視点を介して補色残像関係にあることは、象徴的だからこそ興味ある事実と言えるのではなからうか。学生から見た自分の両親への主観的夫婦像に、男女ともに類似した選択パターンが認められるということは、決して意味のないことではない。

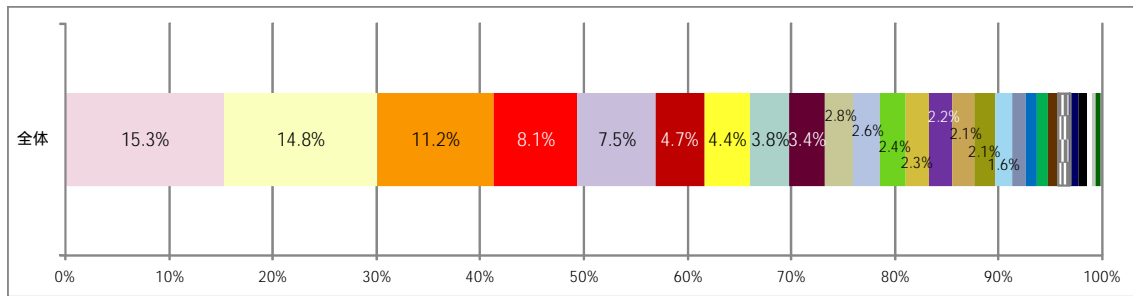


図5 学生全体における母のイメージ

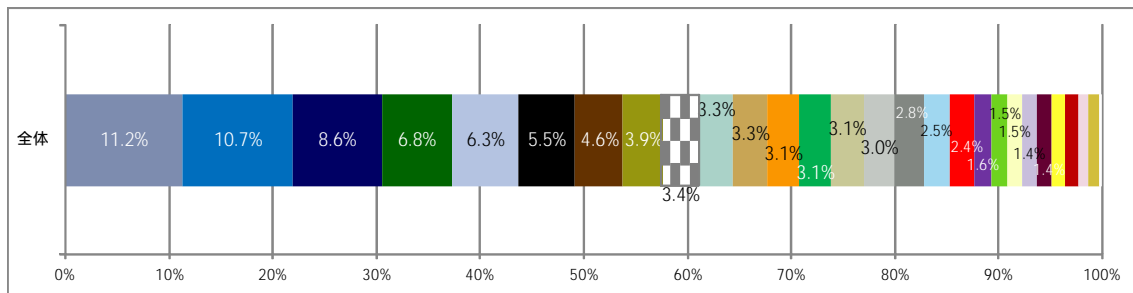


図6 学生全体における父のイメージ

今後の展望

- (1) 「親友」「異性」の色や「家庭の中の自分」や「学校の中の自分」の色イメージについての分析結果を簡潔にとりまとめて人間関係の色の傾向性全体について解析する。同時に、死生観・霊魂観・感情・五感・趣味嗜好・個人的生育環境等につき、クロス集計の手法を駆使しつつも、因子分析や3項目以上の多元的集計に取り組む。それにより、芸術的感性の重層的で多角的な構造解明を推進する。また、ベイジアンネットワーク分析による統計心理学的成果も加味してより総合的に考察する。「赤」や「緑」など個別的な色からの探求も方法的視野に入れている。
- (2) 死生観・スピリチュアリティの分析と色彩感性との関係性について、質問紙の後半部に相当するスピリチュアリティの集計結果を中心にそれ自体及びそれらと色彩感性との関係性の有無や、さらに五感、感情、個人史的環境などの項目との多元的感性交差分析も同時に行う。特にスピリチュアリティ領域については古代インド以来の思想史的な解明を深める。霊魂観については、インドや西欧に比べてアジアや日本では「自我魂」の側面は乏しいことなどが調査結果からも推定できることを中心に分析を深める。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

久保田 力 (KUBOTA, Chikara)
東北芸術工科大学・
基盤教育研究センター・教授
研究者番号：80192566

(2)研究分担者

渡部 諭 (WATANABE, Satoshi)
秋田県立大学・
総合科学教育研究センター・教授
研究者番号：40240486

(3)連携研究者

(なし)